

漢稜



夏山報告特集

No. 5

1957.10

— 溪 稜 第5号(夏山報告特集)・目次 —

・ 卷頭言・夏山及び今迄の山行を顧りみて

吉田泰彦

谷川岳夏期合宿

| | |
|----------------|---------|
| 幽の沢右脇 | 菅野達也(1) |
| ヒツゴー沢 游行 | 近藤澄江(4) |
| サンゲ沢 | 辻 宏視(6) |
| 三国連峯縦走記 | 秋池昌男(7) |
| 一の倉沢・ルンゼ | 田中莞二(9) |
| 一の倉沢・四ルンゼ・五ルンゼ | 山縣昌彦 |
| 四ルンゼ登攀 | (13) |
| 五ルンゼ | (15) |

一の倉沢・一の沢游行

辻勝四郎(17)

| | |
|----------|---------|
| 迷掛け句懸考 | H.T(11) |
| (續)一の倉礼讃 | S.K(12) |
| 山男の生態 | M.Y(20) |



細沢一間岳一塙見岳

辻勝四郎(21)

立山一劍岳

筒井満榮(27)

北ア北部縦走記

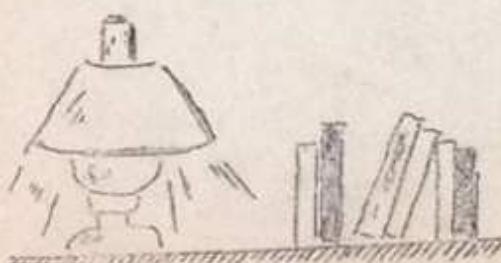
山縣昌彦(29)

・<立山一劍岳一黒部一後立山>

・仲間を語る(4)。

田中莞二

吉田泰彦(35)

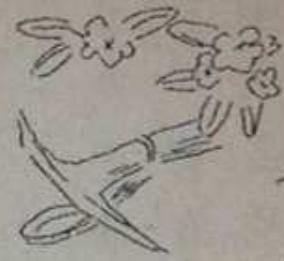


| | |
|--------|------|
| 夏期山行略報 | (16) |
| 会務報告 | (36) |
| 編集後記 | (37) |

夏山及び

今迄の山行を顧りみて

吉田泰彦



今年は例年なく夏の訪れが遅かれた林である。本当に天候が落ち着いたのは八月末中旬に入つてからだつた鳥、好天に豐まれた山行も少く、特に七月中に跳び込んで行つた連中は例外なく降りたり、散々な目に合つた林である。

今夏の山行は当初は、南ア全山縦走、谷川岳合宿、劍岳岩場合宿の三つを大きな目標として計画されていたが、谷川岳合宿を除いては、皆それぐ土壇場にて中止となつてしまつたのは誠に惜しまれてならない。その谷川岳合宿でさえ現地でリーケー格がそれぞれ、負傷、病気事故を起して満足を偽りも出未ず、バリエーションのアタツクは勿論、目的とした強化合宿の実を余さう上りなかつた始末である。

しかし何と言つても残念だったのは、年末の宿題であった草一パーティによる南ア全山縦走が不発に終つてしまつた事であろう。殊に今年は社も豊川、今季を除いては

もうそんな残念はないという連中がマツキとなつていただけに惜ましい。この林を事態に陥へりさせた原因一つに、偏重的な幹部会員の現役コーナー派出という問題がある。

これは毎年同じ顔振れにコースを依頼していた山岳部顧問に責任の一端があると思われるが、同時に、若手会員特に学生の諸君に今後大いに考えてもらわなくてはならぬ問題であろう。来年あたりはどの林を危惧もいくらか解消される一當然、そなむかろを得な、林である」というが、次して来る年事ではなれば、さう少し皆でこの事等について協力し、現役を育成すると共に一方では自らをも向上させる林につとめたいものである。今年の山行は外的的には一見幸運に見えるが、会の山行としては、はなほだ統一性に欠けていた林に思う。小は会の山行計画にも手落ちがあるので、会の山行に全然参加しない人々、会に協力的な山行を続行している人が居ると思われるのほ、残念である。もう少し会としてまとまつて行動をとらなければ、会全体の向上ものびやかとなつて何う氣風も生れず、単なる同好会的なものに陥つてしまつた恐れがある。未だ発足してから日の浅い我會に対するこの林な所をさうのは酷であり、更に画ばかりを強調した独創的名前を見ても知れないが、片校山岳部OB会という特殊社をも含めて、会員一人一人が「俺がやるければ誰がやる」という気構えを持って山行に限らず、もう少し会に対する協力をしていただきたいある。

谷 嶋 岳 夏 期 合 宿

八月三日

幽の沢右股

管野達也

(MEM) 辻 K. 管野

(天候) 晴後雨

幽の沢(奥線は石股)



期日 八月三日 — 六日

参考メモ

山縣昌彦、辻 勝田郎、吉田泰彦、大武昭雄
田中莞二、菅野達也、並塚幸子、辻 宏視
近藤澄江、山崎弘一、松井千枝子、岩崎百合子

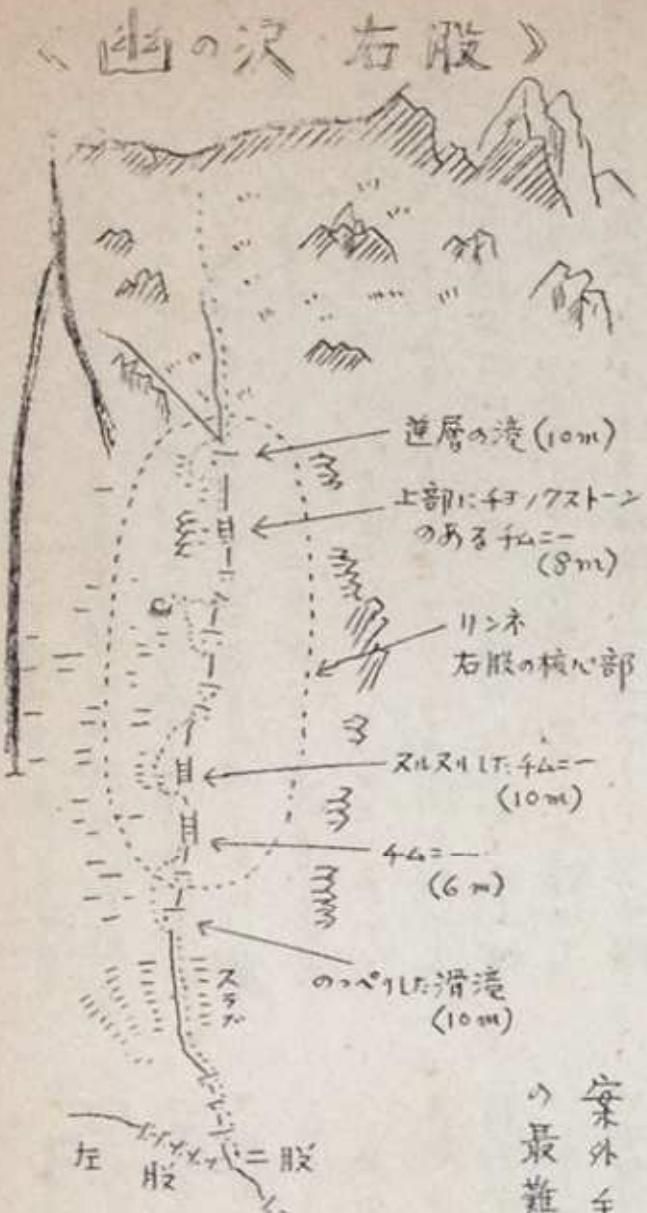
秋池昌男、市川和夫、外会員外十二名
計 二十六名

谷川岳合宿の方一日目は辻全長と共に幽の沢右股を登る事とした。前日の午後から出發して一晩テントでぐっすりと寝る事が出来たので、気持の良い朝を迎える事が出来た。朝食をのんびりと済ませ、下イル、三つ道具等をそろえて六時に出發する。

昨日迄天気が悪かったとの事で旧道はしつとりと湿って、る。今日は天気も晴れ上り、白毛門の方を真綿の林を雲がなびて、る。一つ倉沢の合ノ川は稜線がほつきうと判り、各ルンゼが深く喰込んで、るのがよく見える。一つ倉沢過ると程なく幽の沢の出合に着く。磨かれたスラブの小道を右に左にこよえる。雪深がとけて木だ間もないと見え、両岸の草付はべつとりとは付じて、る。天気が良いで自然と心地はすみ、駄手り食

がらやらちを効かせてぐんぐんと登る。そのうち大きな滻べくも現われて来る。いやべるのをやめてひよいと前方を勝めると左股の大滻が田の前へ見える。いやべる事に気が付いたが、今日の右股は全くその計画どおりで、考へることにした。登る時は簡単に登った滻を下りには、やはりので左岸の尾根を越して右股に入る。鞍の中に入り込んだ。一時間近くエネルギーを使つた末、結局辿りついたのは元の二股であった。二股には一塊の雪のブロックが残っていた。二股から右股に入るしばらくは岩の奥在するせまゝスラブ状の川床だが間もなく視野一杯に広いスラブが現われる。なので左岸の尾根を越して右股に入る。鞍の中に入り込んだ。一時間近くエネルギーを使つた末、結局辿りついたのは元の二股であった。二股には一塊の雪のブロックが残っていた。二股から右股に入るしばらくは岩の奥在するせまゝスラブ状の川床だが間もなく視野一杯に広いスラブが現われる。なので左岸の尾根を越して右股に入る。

オーナーの滑滻は右壁のスラブを登りルンビに入つた。ルンビはいくつかの小滻を掛けて上にのびて来る。途中千ヨクストーンのある千ムニーは千ムニー登りで千ヨクストーンの下まで登りそこから右壁に移つて千ヨクストーンを抱き込むにして登る。この千ムニーのすぐ上に続々又しくした千ムニーで、案外手こすつてしまつた。この滻は案内書きで言う右股の最難關の滻と思われる。滻は上部でハンチしており、右壁はオーナーハンチ氣味の逆層の壁で問題にならず、ルートの対象となるのは左壁だけである。左壁には平行して細いクラックが二本入つている。どちらも取付くには少々遠く、クラックに達する迄が難いそうだった。クラックの下はフェースと拿つて千ヨクストーンの千ムニー滻の下の方へとのびてゐる。寸金長がザックから始めて三道具を取出す。左壁を二メートルばかり登



てから左へ一本ばかりトテベースしてクラックに入ろうと試かるが失敗する。クラックの下部は全然ホールドもスラングもなくどうにもならない。下でジッヘルしている方が見て居てほんくする。やがてそこをあきらめてもとに左更に一本登り、ハーベンを一本打つ。適当なりスラングなく苦労する。やつと打ち込んだハーベンにアスミをかけ左側のクラックに入る。アスミとクラックの間が約一五メートル、アスミが体高の半下につれて右にかたむくので仲々容易でない。次でこちらの番、アスミを外して先に会長が失敗したルートを会長にジッヘルしてもりつて強引に吊上する。登り切つてから右トトラベースしてすぐルンゼに底る。

又モ小滝=三五越すと十五本程のチムニー版の滝が落ちてゐる。右壁を十本程登り上部は左寄りにトラベスして居て、右壁を十本程登り上部は左寄りにトラベスして吊上する。登り切つてから右トトラベースしてすぐルンゼに底る。

(スルくしたチムニー)

最後の滝

a-1c 最も困難



ベースで草付ミ交イククボミを十五本程登る。左側に切つたところは二、三人を休める程度の快適なテラスとなっている。こうテラスの下方は下部のスラブまでスルバウと切れ落ちている。左岸の壁は逆層の数十本のオーバーハングで右股を通じて最も高度感を出る所である。此處からルンゼまでの六本ばかりのトラベースは七十度古越すと思われる草付のみ、ジッヘルを確実にして慎重に行動する。

ルンゼに底つて左をも左滝を次々と快適に通過する。とやんで最後の滝が現われる。上部は逆層でハニカム味なので左壁にルートをとる。滝の基部から左にトラベスして取付く。下部は黒っぽい岩で、どううわけか、ベースで滑り易い。全体にホールドが全くなく薄いでも、左に滑り易い。全体にホールドが全くなく苦労する。ハーベンを打ちたくともリスが浅く打つ事が出る。かならずハーベンがあつたのでそれを利用して右にトラベスし上部をハーベンを一本打つて登り切る。下から見ると意外樂くそうに思えたが、此處で一番危くのが一般ルートであるようだ。

滝を登り切つた草の台地で遅目の昼食をとる。この滝の上部からはすぐ草付が始まり稜線はほつと見え、昼食をとつていろいろな方から腰を下す。

わ川、小雨が、ようつき始めた。まだ空の半分は青空
だ。ところひし、稜線へと向った。

稜線は踏跡もなし、藪でシマツナ木とハイ松が密生してぶり、一つの倉岳に出る事は容易でない。林に思われたので支食沢へと下る。こう頃から雷が鳴り出し、大粒の雨が降り出した。雷に追われる、林立夢中で沢を下る、所までくは下くなり、全身びしょ濡れとなつて立止

り、止りてどくどくと下る。

支食沢は増水して渡涉は不可能で、降るのに意外に時間をくつてしまつた。キマシガにたどり着いた時は殆ど日陽がくれて、足元もさだかではなかつた。

(タイム)

テント発(一、六、五)——幽の沢出合(六、四五)——
二段(八、〇五)——スラブ終点(八、三五)——
最後の滝上部(一、三〇)——テニト着(七、〇〇)

この日は現役を混じて集中登山が行なわれ、ルートは、ヒツゴー沢、ホンケ沢、巖剛(三国連峰縦走)の倉沢の四ルートがとられたが、一つの倉班は途中でリードが挫折し、合流出来なかつた。以下はその時の記録である。

(八月四日)

集中登山



ヒツゴー沢 潜行

(MEM)

山縣、市川、山崎、近藤

外三名

(天候)

曇

註 出の沢石股は一つの倉沢ルートを、四、五とぞ、南稜等に比較して本筋かに困難である。部分的必要な要とは一つの倉の中級ルートに充分匹敵する。岩は堅く、乾燥するので、登攀は快適である。稜線から支食沢に下るには沢に達するまで急勾配で、二、三本落込んでいる所もあるから注意せねばならぬ。

午前一時、リーダーを含む先發隊の四人はマチガ沢出合の幕営地を出发して土合駅に向つた。外気は寒く外冷たさを感じる。真暗な闇の中から空を仰ぐと星が一つ二つ銀の光を放つてゐる。午前二時二十五分、戎毛のせた上り列車は水玉取に到着し、ここで三人の後發隊と合流し、七人(ヒツゴー

川に掛る橋を渡って谷川温泉までの道は広いが多少登って
いるのであろうか、歩き始めに段と調子の整わぬ所には、
こゝ金りでも一寸こなした感があつた。途中下る望て水
と橋内が一きわ明るく目に入る。耳には岩をへんで流れ
る湯博曾川の流れが昼間なら殆んど魚意識の中に過
ぐてそのものが一面の闇の中では我々の感覚審管を刺激
してくるものである。

駆から約四十分 谷川温泉に着いた。此夕からは往は急
に旅となり山に入った感じがする。手持の懐中電灯を頼り
に二段 向上。温泉町の灯も遠ざかり徑巾が狭まくなつた
ところが一層暗が深くなつた様な気がする。单调な歩みを
本十分すぎた頃 何時の間にかあたりが白み始める山の陰がか
すかに見えて来る。こうなつて来ると闇はまたたく間に消え
失せる。

二段に着くと二、三のテントが張つてあった。こゝから約
十五分でヒツゴ一沢の合に着いた。七時よりく湘行
き始める。前方を望むと一面のがスである。歩き始め
ると七、八糠の下へと少しこそく下へ落ちてゐる。左側を
梯子で登つた。それから後しばらくは連続する小滝と所々
に十糠近くと思われる滝が現われるがこゝと言つて一處場所
に十糠近くと思われる滝が現われるがこゝと言つて一處場所
に十糠近くと思われる滝が現われるがこゝと言つて一處場所

青く澄んだ滝壺が非常に印象的だ。沢筋が行くよ
り谷を次第に深みを増して来るが案外に暗い圧迫感
を感じるのはパーティの人数が多過ぎであろうか。

やがて本ルート最大の悪場と言つてゐる千人木の
下門を通過する。ルートを物色した後 初めにリーターの

山嶽顧向が右手から入り一番手前の壁を登つて落口
に立つた。下で見乍ら私にはどうも手の付けられそうもない
ルートだと思った。それで山嶽さんが同じ右手から滝壺を

や、トラバース意味に少し両手を登り落口に出る。その後
二人もこのルートをとった様だ。この滝壺では外に滝壺の
左手から多少おほかがさつていて感じの岩の下を這ひながら
左壁を登るというルートを取つて、バーティもあつた。どのル
ートを取りにしても一寸と手程のものがある。直登をきけて少
し下り天神尾根側に捲き道のある事をリーターから指
示してくれたが、こゝ直ぐ下に短いが降りるのに一寸困難な
滝がだったので我々女子二人は右手の草付に入る事にした。
取付は干掛けになるような草が少しくなく困難を極めて、
直ぐしつかりした草の株が足場となつて割合に安定を保つ
べから歩く事が出来た。が対岸の仲間から遠かっていく様
を気にして、こゝか不安を感じた。しかしリーターの奮闘
で無事フルシユを抜け切り下りの上で無事合流する事が
出来た。今までの不安がされに拭はされた。再び秋の次

筋を過ぐると意外にもニカルートで雪渓が現れた。真黒

ではあるがやはり魅力的だ。さくさくと雪渓の上を歩く
とそう冷たさがワラジの底から浸せ込み、全身が氷に覆つ
た林にフレッシュな感じになり今迄の疲れをすっかり忘
れさせてくれる。西ヨリ没われた西岸には去年の枯草の
下から小さな緑の頭をもたげているものもある。この辺
に咲く淡紫色のミヤマアオイ(マツ)が一々か人眼を引き
これが微風を受けて動く林とその色合が非常に良く
調和がとれているのに感ぜし余がら眺めた。

続いて二、三の雪渓をすぎながら登って行くともう大
部頭上も開けて来て、るがガスの爲稜線は見えない。
足元の水量が急に減つて来て、るのに気が付く。天神尾
根と中ゴ一尾根への分岐点で木のなくなる前に昼食
見えた。わがかな霧のはれ向こう時々稜線がくっきりと
見える。しかし上空は相変わらず白と黒の雲が交錯して
いる。此よりワラジを脱ぎ沢を下る。やがて林々
を抜き、更に一氣に肩の小屋へと辿り着いた。時に十二時四十五分。

一面のがスに眺望は皆無だつたが草付に身を横たえ
ながら、かつてこの頂に立つて見て展望を改めて自分の眼
前におき生して見ようであった。

(MEM) 並塚、田中、菅野、辻

サンゲ沢 湖行

辻 宏視

八時半マチが沢出合のテントを会長、副会長に見送ら
れて本發。(誠に光榮にて、とません) 太陽は今日キス
モラくと輝き速く編集室はその反射で冷たく光つて
いる。

三十分钟左右平坦な徑を歩き、暑いので早目に沢に飛びこ
む。水量は多くない。一行はワラジに履き替えてすぐ腰
を上げる。トツアとラストは田中、菅野両ベテランが引き
受け紅一卓の並塚娘と小生がアンコに直午に入る。
列ドルートラ篷板に苦労する事もなく快適な歩調
が続き、やべて五段の渡に出る。渡が芳しくて落口が角立つておらず又全体が一枚岩ばかりである。
度は案外にあるらしく吉日く澄んだ滝壺をもつてゐる。
こゝで小休憩。菅野氏キウリ一本拾得、皆でギリスようく噛る。(以下、下山までさまよな物を拾
う。)

滝ナリ三十分钟左右でガレ沢との分岐点にある。日
本がり、かつてこの頂に立つて見て展望を改めて自分の眼
は時折かけり、又かつて照りつける。上部は雪渓、

ギラリと光る。ルートも相変わらず谷易だし皆もしごく
呑んだ。向もなく始めての残雪に合う。切って見入る中

までうす黒くなつており、残念ながら食ひをかつた。ホーゲ岩

が特徴のある姿を現わし、ガスがそれを越えて滑り下りて

来る。小林憩の後出発。だんく「巨岩が勇くなり

以後ルートは殆んど左側にくる。十一時上部の雪渓

に到着、中央部はボッカリと空洞になつており上手から

吹き込も風は空洞中をかけてガス抜の冷氣となり、我々

日へけて吹き本して来る。まさに一吹千金の感、雪渓を

登り始める草鞋の足は痛々までに冷た。オドモ百二十

米で雪渓は終り、右側の草付を取付く。この辺は遅

くまで雪渓が残つていたらしく地盤がゆるく草ももろく傾斜もぐっと急になるので並塚娘始めてアイゼンと付ける。ここでルートは二つに分れ、左オレは大滝に向付く。

ゲルートを右にとり水に別れをつて草付を更に進む。

スマラの岩壁があちこちに見えて始め高度はぐんぐんと

上がり天神尾根に喰くたる人の姿を見る。テラスで小

休止、涼風に吐息を付く、時計は十二時を指す。樹

團を切り立った傾面は鋭く落ちこみ、ガスの中に天神尾

根が見えくれする。山七変花等が喰くと花を風に

よがせやがて我々にやさらぎを与える。

、れよ下ニテ岩直下のバットレスをさけて右に右にと

トランバース一時。今西里尾根にヒヨツコケとある。ガスは吸
しくなり遠望は効かぬ。

午後二時頂上でヒツコト沃班と合流、巖剛をテント

へと下つた。

十三回 運峯縦走記

秋池昌男

八月四日 天気は曇りがちであるが、雨は降らない、林である。巖剛新造は今朝夜行列車で下りた人が列をして登り出していく。西里尾根は奥々とする人、人人。抜き抜かれまして八時丁度谷川岳の山頂に立つ。せよ頂上には人があふれてゐる。視界内に見える人の数は優に五百人。はるか前方に通りすぎる雲の合間に

かり万太郎山がのぞまれる。

三十分の休息の後、西に向けて縦走路古下り始める。

五百米置きに肩の小屋から距離を測るした道標が立つ

てる。十行程下つた時、S君が昨日痛めた足が痛み

生えたと言うので、その後はや、ペースを落した。更に下

るうちに急に視野を展けた。近くは万太郎山より、遠くは

越後の山までほつきりと見えていた。左下下方に

は尾根の縦走路より三百メートルで雪渓かのびてゐる。

ピーコをいくつも起すと足下に赤いカマボコ型の小屋が見えた。大障子小屋である。一万太郎山の登りにさしかかった。

今日最後の登りである。疲れているせいか、すぐ目の前を見える頂上まで歩きに迷ふ。やつと/or/で登り切った時はくつたうとしてしまった。元気をつける爲に、何か食べる事とした。そこでパンを取り出す。聞くところによると、このパンは南アルプスに行つた時の残りで二回向も前の物だぞ)であろう。

その堅さと言つたら話一にならなもので、先日、誰かと言つた林に野球のボールの代りに使つてもぶれそうもないなど言つた代物である。この林な堅パンも一生に一度ぐらいいかなと思つて有難かった。二目ばかりが生えていて食らへなかつた。そこで勇気百倍元気によかせて一万太郎山を下り乗越の小屋に着く。ゴミ箱小屋と言われるだけあって非常にきたなく、冷蔵庫わざる。

されば、必ず荷を置いて急ぎ水を吸みに土掛けろ。行きには水を飲みたせいか早く水場に着いた林な気がしたが實際には十分程かつた。冷たい水でのどを潤して。

ラジウスで飯を炊き、早すぎるけれど四時頃夕飯を食べて一休した時、今まで我々三人だけだった小屋も他の三つのパーティの人で混んで来たので我々は寝る事にした。サリを厚く敷いたので心地良い。

オニ日(八月五日)

五時起床。三人共非常に体の調子は良い。六時に小屋を出たが、ガスが深く前後十メートル先は白くかすんで見えない。左から吹き上げて来る風は強く、手は冷たくなってしまった。以後数時間、全く天気は変わらない。たゞその中を急ピッチで法師温泉へと急ぐだ。

法師温泉に着いたのは十三時三十分。バスの発車が一時三十分であったので温泉につかる事にした。

温泉は広く十メートル四方もあつた。ゆっくりと疲れを流した。参考までに申上げれば入浴料はめずか二円である。

(タイム)

オニ日 マチガ沢旧道生合(5.00) —— 西里、尾根

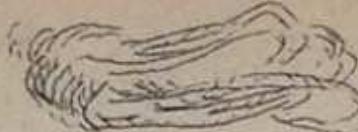
吉川の谷(6.00) —— トマの耳(7.55 — 8.20)

—— オザカの頭(9.15) —— 大障子の頭(10.15)
—— 一万太郎山(11.15 — 12.35) —— 乗越小屋(12.45)

オニ日 乗越小屋(6.00) —— エビス大里(6.50)
—— 仙の倉山(7.40) —— 幸標小屋(8.50 — 9.20)
—— 三国峠(10.55 — 11.15) —— 法師(12.30)

(八月六日)

一の倉・Cレンゼ



田中莞二

(M E M) 山縣・辻・菅野・田中

(天候) 曇・時々晴間

夜

羊の雷雨にたゞ、くれたテントから首を出せば、拭われた林に空は蒼々。会員の大半も昨日で帰つたが、折角汽車貸をかけて来たのだからと通用期間までカツチと腰をすえた御仁を交えて、食事中に今日はCルンゼ行とする。

X

X

X

より先に行くバーで居るとは知らなかつたので大いに驚かれる。距離に比較して声が中央壁に反響するせいか、非常に近くに居る林に感じられる。落石通り反響もなく無気味である。

右壁のガリーを登りつめる所、中央壁のドッシリした、ミットレスに圧迫されながら、心を放遠する様だ。下々下を六、七メートルばかりのチムニーの右壁を顧問が先づアメツツノ、

幾分苦労してハンタ気味の壁を通過する。その後菅野が右側の生張った岩を特色、平曠なホンドもあるぞ、一同それに従う。

ルンゼの小渡を次々と軽く通過すると一ヶ所水を落としているせま、千ムニーに取掛る。脚大をトツガに次を行く全長のズン洞を体験は容易に通過を拒まれる。小生途中で付

さわる事發今、北のナックがつくる林だ。顔にかかるしぶきに小気味よい涼を感じ、時折耳をかすめる岩石、駆け

オニルンゼの危険な壁は暗く、妖魔の如く圧迫を感じる。されど千ヨックストンを持ち、水量はさほど多くない。F1、F2とも遠距离から見た程高度感はない。平曠なテラスを控えて、落石でも生命に影响する、平曠なテラスを控えて、落石でも生命に影響する、平曠なテラスを控えて、落石でも命に影響する、平曠なテラスを控えて、落石でも命に影響する。

ねれた岩をスタンスに注意しながら慎重に登る。我々は自然土部から起る落石を知らせるためを声。我々

立った。サツキに達した事を知る。

良く付けられた踏跡に従つて下降すれば、水量豊かな

広河原には、と安堵感を味う。正面はカス樹つゝるが

ゴハシマツをほこむ本谷のスラブのスケールと、岸に立つ大

倉、白毛竹のゆる、枝葉との対比の美と面白さに、あく

事かな、休憩を充分満喫する。

時間は十二時半、平野 登食にとかかる。主食こそ堅パンに少豆の餌はさびしが、副食の豊富な、

とは、それまで食道の通過をなめりかにする。

さて二ルを右側のリジンでハーベンなど打つて苦心していく

或るペーティ（落石を起したのはこの途中）がようやくザッテ

（落石を起したのはこの途中）がようやくザッテ

ルに頗る出下頃、十分休息をとつた我々は広河原を後に

して上部の山林にかかる。割合巾の広ハルンゼ

状態で続く。本流に沿つてわがかな草付と踏石帶の中を登

る半四十分程でちよつと一バットレスが控えてくる。案内

書には比較的困難と書きいてあるが、さほど苦労する程で

もない。よく急峻な熊笹の登りが現われ、あつけ

なく棘棘へと飛土す。それと共に本谷から吹き上くる

がスが今日の合宿の最後を告げる如く俯瞰する視界をささぎつてしまった。

（タイム） マチガ沢出合（九、一五） —— 広河原（

十二、三、一一、一〇） —— 枝葉（二、〇〇）

合宿記録略報

八月三日 西黒沢・サンゲ沢……山縣、大武外三名
幽の沢右股……辻、菅野
八月四日 (集中登山)

ヒツゴー沢……山縣、市川、山崎、近藤外三名
サンゲ沢……菅野、田中、並塚、辻(冠)
三国連峯梁支……秋池外二名

八月五日 サンゲ沢……吉田、田中、岩崎、松井外二名

蓬峰越……山縣、並塚、近藤

一の倉ヒルゼ……菅野単独

八月六日 一の倉ヒルゼ……山縣、辻、田中、菅野外二名

蓬峰越……山縣、並塚、近藤

一の倉ヒルゼ……菅野単独

八月七日 土合——湯脇曾温泉……山縣単独

合宿を終つて

(丁) —

今回の合宿は主として初心者の技術向上を目的として計画されたのであるが、リード一格に病人、ケガ人が続出してその負担今では余りだようである。食糧計画などをえて今まで不満な点もあったとも思われるが、女子会員を交えての和気合々としたテント生活は今までにない幸やかなものであった。今後もこう様な強化合宿には全会員こそつて参加せられること希望したい。

迷俳句愚人考

秋

立つ教日前、NとDとKそしてTは谷川岳、サシタ沢遍行を行つた。

天氣は晴、暑けれども下界のあいベタベタした。

らぬぬいた暑さはない。それにもどが渴けは、その場にへたり込みは哀れ。遠く草の葉より滴落し狀水が、幾千万の岩に淨化され眼の前を流れてくるのだから。

次には一行の外に誰れも居ない。寂然とし空気は人を一歩も奥へ走寫によつて振動されるくらい。それが、天まで聞く走寫によつて振動されるくらい。それ故に、一行は至極愉快に谷氣に転石をひろべ歩いている。二

度窓戸赤トンボが静かに羽根をヨロツカして鳴るのみでなく、昆虫は晚秋に群をなして西へ西へと飛んで続ける。何が為か知らぬが、既に自己の保命を絶ち、そのかかれて死へる旅はとづこゆつて、ころように更してならない。慣習とは云ふものであら。

だ。なんとか五七五にて、やたらに「ヤ」だつてある付ければ俳句になるだろう。

H・丁

薄雲に赤トンボが静かに羽根をヨロツカして鳴るのみでなく、昆虫は晚秋に群をなして西へ西へと飛んで続ける。何が為か知らぬが、既に自己の保命を絶ち、そのかかれて死へる旅はとづこゆつて、ころように更してならない。慣習とは云ふものであら。

あさづ去りし一瞬の空の日さが空にて空が白く残ったがときかれると困るのである。しかし、何となくそんな寝かしたのである。強いて云ひば赤トンボの抜け出た音視して、眼を急に他へと移したが、赤トンボの抜け出た音空に何からの影法師が白く拡がつたかも知れぬ。一行、雪渕を越えてスラブ状の岩壁を避け、草竹のルートを上へ上へと前進する。ガスが出て来た。天神尾根も半分からスッポリと霧の幕によつて双方に切り離され、手を掛けた岩の裂け目から山紫陽花が淡青んだのも珍らしか無理とは言ひ切れる。と云つても丁子掛句は余りに無縁である。唯一圓中学生時代、武駿一俳句とは何ぞやと同様の時、おめ下、腹せす川柳一似た短歌なりし。ではあれど何備うもの圓中、名駿を村ぐらうである。ではあれど何備うものいや梅雨期の紫陽花を紅色を寫すうは東京を南へ向うる。

う。

紫陽花に秋冷いたら信濃かな——杉田久女——

の名吟が二小毛東裏書きする。この日の前の山紫陽花も
永雨が寂莫なる谷川岳を包むまで一つ咲き続けるであ
ろうか。そしてそれまでに人に愛でられるであろうか

美しすて、淋しき羽や山紫陽花

紫陽花や雲の去来の定まらず

西黒屋根下ぬだ時は、相当かゞへ濃かつた。シノカラK
と下う二人で肩の小屋へと向う。やがて径は一方に傾斜
して平旦になる。ワラジの杖はナーゲルのKの杖^T後^ハウ
自分の足元に祝線五落一余かりもKのナーゲルを見失う
まゝと続く。ガスが荒、粒子となつて二人に向をとび交
いともすれば二人を離隔した。ほんに静かす不^ハヤリした
空虚な数分間であった。

白樺を静かに霧づ行く音へ——秋櫻子——

秋櫻子は白樺林を行く霧の音にハツとしたらしげ、丁は
若の女性のやうな声にハツとした。よく見れば赤じ黒
のチエック入ったワインシャツを着て、スラブをはいた顔丸
い娘である。眞剣そうな口許にかすかにうぶ毛が里から
て下に徑をきいてゐるのである。解らぬでモソモソして
いるとKが「くくと笑って手て、早速剣刃下^ハに、
指導を始めた。ホツとした所を撃てた林を一瞬で

事、良^ハ事。

径向える霧に乙女、眉太し

肩の小屋から下は一人山頂に立つた。カスで何^ハ見^ハ。
た、谷川岳山頂と書いた板切れとベンチだけが無心になる
だけである。

時計を見ると二時、五時^ハの汽車に乗ろう。それには、

急がねは余りぬ。かくて下の「ミセ宗匠」はやを^ハ残
黄^ハ頭布を脱ぎ捨て、スタコラ下山にかゝつた。

岩下るナーゲルの音^ハカツ

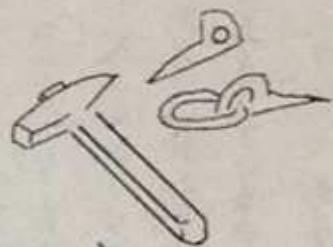
濃霧が一の倉を包んでいる
やうに見える岩壁は
暗く、重く、私を攻める。
たまらなく恐怖をおきて
山を見続けていた
岩壁はピクともしない。

濃霧が一の倉を包んでいる
底知れぬ静寂は
限りない憂^ハと、生命の深を
こころと薄きれてはいる
ここに私は生やる事の最大の底^ハが見えた
そぞり立つ岩壁は
自然の慈愛に満ち満ちていた。

—S.K.—

倉沢の二

四ルンゼ
五ルンゼ



一山縣昌彦

八月一五日 一七日

辻勝巳郎・山縣昌彦

八日 晴

晴

四ルンゼ登攀

谷川岳合宿の一週間後、雨びオイルを肩に上越線の人となつた。今度は少しがつちりしたのをやろうと、うやけで、予定としては一五日に四ルンゼ(本谷)、一六日に三ルンゼ、一七日には夜

浦和に用があるので早めに出来たら一の沢をやるつもりであったが、又々雨に祟られ、一六日は雨中五ルンゼに変更、一七日は午前中から湯檜曾温泉へと相成つたのである。

くらし。

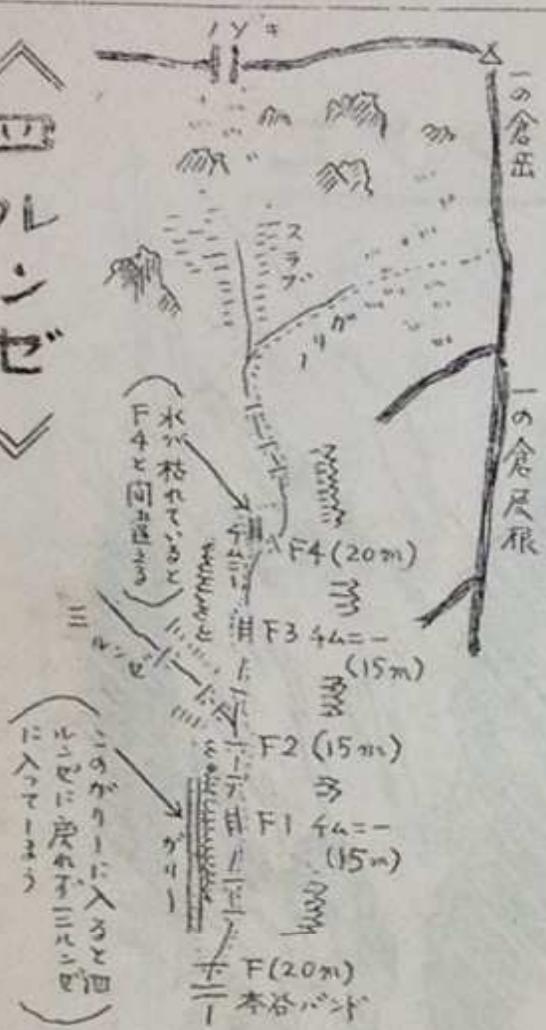
本谷バンドから下を正面から登つてかりニルンゼ寄りの壁を右にトラバース気味に登る。絶好の日和に気をよくしてガリ一と登つてゆくと何時の間にか三ルンゼ下の前に出てしまつた。まあ明日の偵察だと云ふ説けをしながら壁を右に振りて四ルンゼに下りようとしたが、一寸下りられるようなくがな。鋸ひた古ハーケンを見付けてそれをピンにして下りたが、こゝで大部苦労させられた。ともかくニルンゼのルートではルンゼを高れるのは禁物である。下り立つたのは四ルンゼの下2上部であつた。

續く、サックスストンのほよつた千ムニー滝下3は、千ムニーの中から千ヨツクストン下をくづつて登るルートをこの前や

（て、るべ（「深縫」オーロ）今回は左壁をアタックする。取付ヶ更、ハショルダーで取付く。中央部から上は割に楽に登れる。

次いで四ルンセ最悪と言わせる下4である。此前は此處で苦斗を強いたものであるが、成程右壁は滑れて垂直近く、左壁はスラブ状でホールド・スタンスを乏しいようである。強引に左壁に取付く左手の岩を手と足で穴張りをぐら身体を持上げて登る。バランスを要する緊張したクライム後、無事登り切る。

振り返って調べて見ると前記右壁（左壁）には上下二本のバンドがまつてあり、下方のバンドは滻（チキト）の少一チ前で上部の壁がオーバーハングして通過は不可



能である。よく、うバントで行かづまるらしく、そこには縄がぶら下りてゐる。（「深縫オーロ」の四ルンセの記事中、一下4のバンドはこれが指してゐる）。普通ルートになつてゐるバンドはもう一段上に走つてゐるバンドで、これは落口まで樂に登れそつてゐる。このバンドには滲の手前から右壁を登れば容易に登れそつたが、下からは一寸余り難いバンドである。下4を登ればもう悪場は終り、荔と小滲をいくつか想せばルンセは急に展け、明るくなる。振り返れば滲に突上するスラブが扇状に開け、木ベキラカとよびやめきながら流れてゐる。右手のカリを逃つて一の倉尾根へ出る。一の倉岳に着いた頃にはいつもの様に陰険なガスか一の食倒を嘗め、始めていた。

ヘタイン

マチガ沢土合（六・三五）——本谷バンド（八・〇）——
F2上部（九・四五）——下4上部（一一・〇）——
——一の倉岳（〇・四〇）——肩の小屋（一・三〇）——
マチガ沢土合（三・〇）

（註）四ルンセ登攀時に於ては出来るだけルンセ通りに直登していく。側壁は仲々悪く一旦ルンセを離れると容易にはルンセに戻れなくなるから注意すべしである。

セソルンル

16.



へ天候 レ 雨、後曇

昨夜から雨は、くらか小降りにはなつたが、まだ降り続けてる。これでは三ルンゼも一の渋を諦めねばならぬ。

朝飯をとつて、此の前の水上山岳会のパトロールのお父さんがやつて来た。顔剝染みになつてしまつたので、お父さんと御馳走し話込込んでいく。

とにかく出掛けでみようと小雨の中を出発、九時近く本格化に到着したが、何にしてもこのガスと雨では全くアイトが湧くて未だ。濡れたエボシスラブを下るのも気が利かないもので物足りないが五ルンゼを登る事にする。

それにして木量が多く、こんな日にシャワーを浴びるのは用口で、下3まで右を捲く事にする。天気さえよければ、五

時、二十九度までアキリしてるとヒュンゼに入つて、まうそ喰がある。ガスで分らぬが適當な所で五ルンゼに入る。丁度下3の上であつた。下3は上から見ると快適な千ヶ一ヶ所で、天気さえ良ければ惜しまれてならない。既に此の頃より、下着まで雨が浸せたり、あとはマケ糞氣味に次々に滝を直登していく。

しかしファイトが湧かない時は駄目なもので、いくつかの正面フェース状を途中まで登つた時、どうにもならなくなつて、左手のクラックから登つた丁君にサイルを下してもらってやつと登つた始末である。

かスの為、衰くは分らなかつたが二股らい、久に先、左手を登つていくと、谷川岳には一寸珍らしい花崗岩の面白い岩に出る。この頃、やうやく雨も止せ、ガスの間から薄日が現れて来て束なので、この岩でゆっくり休む事にする。

この岩は高さは十本に満たないものであるが快適なアーチヤリッジを持ち、ネイルド・アーソががつろりと利してくれるので齒人だり、军兵ヘトリノクマを撮るのに絶好である。まあ、五ルンゼでは下3と此処が面白、外と言ふ。あとは例々通りの倉岳から肩の小屋、そしてあの館を飽きする巖剛の下りである。

ヘタム

ツメ近くの花崗岩の岩(一ニ、〇〇——一、〇〇)——の倉
岳(一、四〇)——肩の小屋(ニ、三〇)——マキガ沢出合(一
四、〇〇)

八月一七日　へ雨後星

昨夜から又雨が降り続てる。いろく雨でも登れる

ルートを詰し合つてみたものの、この天気ではマイドも生下
御老体、膝も毎度の嚴剛の下りでリウマチ発生気味と

なつたので荷を捨めて下る事にする。土合駅に着いた時は
丁度上り列車が出てしまつたので又湯檜曽までテツる事に
する。四十今ばかりで湯檜曽に入る。町はずれの旗刺染
サカチフホケタ E 旅館に入り一風呂浴びる。

湯檜曾では日が射しているが浴室の窓から湯松曽川に
沿つて谷川岳の方を望むと、相度ら下寒川雪が覆つて
る。最後は丁君き山の帰りの温泉というものが大分ある。
気に召したら一事を附け加えておこう。

夏期山行略報

7月10—24 北アルプス — 槍ヶ岳、猿ヶ岳

猿ヶ岳外

10—22 北アルプス、涸沢

涸沢外

14—15 南アルプス、駒ヶ岳

駒ヶ岳外

ワ、15(21) 南アルプス、涸沢 — 向岳 — 堀見岳 — 过早山

23(28) 南アルプス、仙丈岳 — 鳳凰 — 吉田外

23(28) 南アルプス、仙丈岳 — 北岳 — 鳳凰 — 山縣过村

23(28) 南アルプス、仙丈岳 — 北岳 — 吊尾根 — 斎藤外

23(28) 中アルプス、駒ヶ岳 — 空木岳 — 辻外十三名

33(6) 北アルプス、白馬岳 — 後立山 — 猫崎外

6(12) 北アルプス、岳沢 — 山崎外

10(22) 北アルプス、立山 — 剣岳 — 筒井外

14(22) 北アルプス、裏銀座 — 垂江外

15(17) 谷川岳 — の倉沢、四ルシゼ、五ルセ — 山縣辻

21(31) 北アルプス、立山 — 剑岳 — 黒部 — 後立山

25(31) 谷川岳、ヒツゴト沢 — 山縣辻

30(31) 秋父、雲取山 — 吉田外

9(15) 谷川岳 — の倉沢 — 河野外

22(23) 南アルプス、鳳凰 — 近藤

(以上会報誌のあらわ山行)

行 溪 潟 の 一 倉 の 一

（MEM）
（天候）
菅原、
野辺、
過



一過勝四郎

一、沢は一の倉でも有数の悪沢と聞いていたのだが、

その渓行は何か不足しない感を抱かせた。

七時 本谷ヒ別れて一の沢に入る。八時には残つていた雪も

消えて、水量も余り多くない。

暫りくはゴーロ状であるが、やがて小滝が連続し、現われ始める。これらを次々に左右に越えろと両岸がせまってゴルジエとなる。なまもゴルジコの中古小滝が連續し、急に沢が左に折れるところ十五米程の丸く凹んだトヨ状の滝が落ちる。これを右の草付から越えると、この上で右へれる。千二丈の直登を去る。さうしたがシマフーとなる

合の一部
第一程入ったところで、よく一の沢の核心部に入り、合感がする。

すぐには上部が右に斜りて、ハムニーにかかる。これは左壁に取付て途中のハンドをバランスでトラバースして落口より大分上方に出る。あくまでペーケンが一本打込んである。今をも小滝二本を越すと滑滝にかかる。ゲート

ブックに言う一の沢が一昼夜の寒場らしく、この滝の右手に上部に伏けるカラツクが一本入っている。此处でカラツクにルートを求める。チヨソフストンに足をふんばって突張りながら登ると上部ト一本ハーケンが打つてあるので、これにビレーしてカラツクから抜出す。後は滝の落口まで準備トラバースである。

この上には五米程の小滝が現われる。これはガイドブックによれば左壁をシミルタード越すが、右壁を大きくトラバースする事になり、が釜に入つて正面に取付けば少々シャワーになるか何と言ふ事である。この辺ニヶ所程に捨て縄があるのを認めたが、これは上部の寒場に手をもつて退却した後と思える。すぐに十米三段の滑滝を迎える。左壁にベードがあるが上部は苦で悪い様だ。右壁は容易である。次いで八米程のハムニーが現

ので右手の答の村着した窓みを登る。更に大きな石の
つまづき滝を左から、狭まつた滝の中に入つて右から趣す。
さつぱり悪場らしいに出喰ひやないので、ミシガ柏子
抜けの形である。が、この次に本格的な悪場の一ヶ所
アンとして控えていた。

上部に大きな千ヨツクストンを持った幅の広い千ムニー狀
の滝で、流水は落口から右のスラブの壁を伝ひて落ちてゐる。
一見一たところなるくしたスラブの直登はホールドもな
く困難の極だ。この滝は上部二三メートルは何とかホールドが
ある様に思えるので横の壁をトラバースして取付く事にし
た。



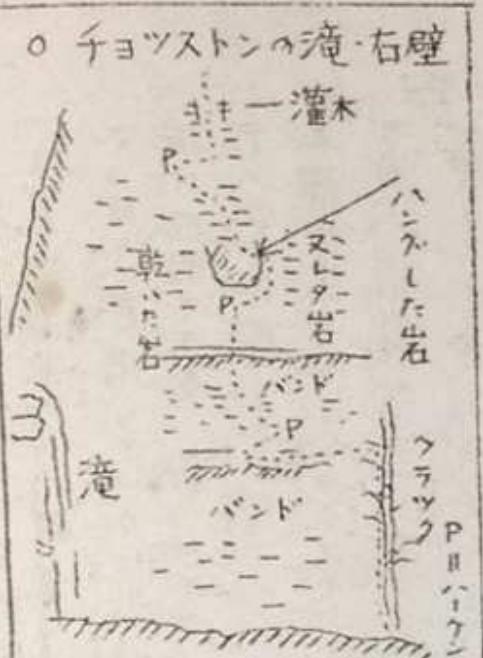
此處から直上ルートを取る事にする。

引返し気味に右方に出て、ハーケンを一本打ち、手をも
四メートル程登ると、幅三十センチ程の完璧なバンドに出る。
此處でジッヘルして後続のKに登つてもう。岩が濡れて
いる為にジッヘルしてゐる間に腰や背中がびっしょりと濡れる。
此のバンドから上部草付まで約十五メートル程かこの

壁でも最も悪、ところであつた。
まずバンドから四メートル登ると
正面にオーバーハングしてゐる
岩が現れる。その左の壁が乾
いた岩となつて上部に続いでいる
ので、正面を敬遠してどちらに
取付く事にした。先づハーケ
ンで岩の基部にハーケンを打ちか
乗出しへ掛つたが、いか取付け
更など何ともホールドが遠。
やもなく両ひハニケの下に度り

滝から十メートル前の方壁に上に向つて走つてゐるクラック
をセ、ハネ程登つてから構へ滝に向つて延びて、各バンドをト
ラバースする。しかし此の壁は下から見た時はどう難い
事うに思えたが、いか取付で見ると仲々に悪く、
バンドも途中で途切れてしまうので度へのトラバースを断念
した。

今度は逆にトラバースして右手の壁を物色する。しかし此処は一面濡れて苔むした岩で、片手にはとてもなりそうもない。こうなると直上ルートより下に出る。Kに元気をもじってジッヘルを頼んでハシゴした岩の側面に出る。殆んどホールドの全く壁をゆづかに岩の裂け目に生えている草を駆りにバランスで身体を持ち上げねばならない。この岩の側面は正面程ではな、がいくらかかぶり気味で、ハーベンを打つべきリスもなく、左足の指先がわざかに掛かるスタンスが一ヶ所あるだけである。思い切ってこの壁の乘越しが策し、Kに声を掛けると久シヒスタンスに足をふん張って乗り出しバランスで何とかこの嫌な位所から抜け出す。しかしこの上部にはなにも濡れたスラブ状の壁が続き、これを左にトラバース気味に登りつめ上部でハーベンを一本打ち込んで右上にバランスで登り、上部の灌木をつかもうと試みるが、サイルがしばしけ岩角に引掛つてバランスを失、かける。



ようやくの事で、

灌木をつかうは後は灌木と草付の中を逃れ泥付バンドに出てホッと一息付く。(こり壁は下からの見掛けより大分悪い)ハーベンを打つベリスも殆んどなく、又打残されたハーベンは一本も見当らなかつたうでルートとしては殆んどどうきていないようだ。普通には我々が最初取り付いたクラウフを上部まで登りつめ横に走つてよう泥付バンドをトラバースして突破していくようである。滝の左壁は一見容易に見えうが上部のトラバースと沢への下降が非常に悪い林に思える。)

ハニドからなをえトラバースを続ければ滝を越して沢へと戻る事が出来、この辺で一の沢の核部を終り上部にはあり特徴のあるシンセンの峯が姿を現わしている。十米程のチヨツクストンを持った千ムニーを右手のスラブかり越して再び沢に戻れば水もなくなつてやがて推石の崖地となり、これを曹らく逃れ泥付ととなつてやがてシンセンのコルへと進む出す。

度にガスが一画に立ちこめて、雨がボソリ／＼とや

つて来た。

(タイ)

土合(五、〇)——の次土合(七、〇)——シンセンのコル

(一、五一、一五)——シンセン沢を下る——マキガ沢

(一四五)——巖剛新道——土合(三、〇)

M.Y.

彼

もそろく年頃です。

平生石部金吉の林を彼も山から、特に長々山旅から帰つて

来ると女性が美しく見えて仕様

が全、そうです。人気の少ない

奥深く南アから再び人里に出

て来た時など格別で、先ず、

二人を山懐に二人を美人だと

驚き、村に入るとこの村は美人

村かと思へ、町に入ると三ヶ町の

女性の平均高は市より高さを思へ、汽車に乗

り出でる毎に彼は悲し氣に「なるべく少しくなるべく少く」と哀願を繰返しました。友人が植物を

取る暇がないようにと余るべく足を早めていた彼へい

ふ向か前方に姿が見えなくなつたので、その友人が

振り返ると、彼は後の方じやがけ込んで何をやつて

います。友人が引返してみますと、彼は手を泥たらけにしてせっせと先程枝が捨てられた一本のキスケ

を地面に立ててあります。そつはもう付モハしないよ

、と言おうとした心優一、植物研究家の友人は、

無知野人ではあるが心根優しく彼の為に黙つて

それを手伝つたのでした。初夏の爽やかな風が二

人のまわりを流れていた日でした。

山男も本当は心優しく人間であろうとい

けた野人を見られていました。その彼は山はどんな



生態の男の山

心優一、山男の詰

作用を及ぼすのでしようか平地では花など一向目を

向けないこう男が、山へ入ると岩蔭に咲く可憐な

花に頬張せて、ダンディのフランス山人の歌による交響曲、

カメロディーを口ずさんで恍惚としている事があります。

或る時、研究用として植物を採らざるを得ない性

分の友人と山へ出掛けました。友人がシヤベルを取

り出でる毎に彼は悲し氣に「なるべく少しくなるべく少く」と哀願を繰返しました。友人が植物を

取る暇がないようにと余るべく足を早めていた彼へい

ふ向か前方に姿が見えなくなつたので、その友人が

振り返ると、彼は後の方じやがけ込んで何をやつてしまつて、友人が引返してみますと、彼は手を泥たらけにしてせっせと先程枝が捨てられた一本のキスケ

を地面に立ててあります。そつはもう付モハしないよ

、と言おうとした心優一、植物研究家の友人は、

無知野人ではあるが心根優しく彼の為に黙つて

それを手伝つたのでした。初夏の爽やかな風が二

人のまわりを流れていた日でした。

山男も本当は心優しく人間であろうとい

けた野人を見られています。その彼は山はどんな

彼は余りの山氣枉で、どうも纖細なセンスに欠けた野人を見られています。その彼は山はどんな

七月一五日（二十一日）

才一日（七月一五日）（暗）

（塩見岳）



細沢一間・岳一塩見・勝辻郎◆

甲府からバスを終点芦安で捨て、同乗の二十人程の登山者に混つて平坦な道を夜又神峰へと向う。

雲も多ひ、青空の部分が次第にひろがって下申分々に出現である。

広河原に通するバス道は既に峠を貫通して、トランクが何台も登山路を横切ってはすゞしく。

九時半峠の茶屋に着く。一休かけて荒川の様子などを聞きながらお茶をする。此處まで来ると登山者も鳳凰方面へと姿を消して、野呂

川へ下る者は外に誰れも居なかつた。峠から一時間余りほどまゝし
な、急な経を下る。青く淀んで野呂川が見え始める音も聞こえて
やがて鮎差に着く。河原で襷に来て昼食とりかかる。

河原では三日程前発生した東大

生の遺体捜索隊が捜索作業を行なつていた。

野呂川はしばらくは左岸を進み途中で吊橋を渡つて右岸を行く。左岸の切り立つた岩壁と右岸の四五十メートルの滝の落ちる様は見事である。

やがて荒川の六合に着いて野呂川に分れ、五分程河原を進むと左岸に

荒川小屋が立つてゐる。しかし何ともモタモタ小屋なので再び小屋を出て、吊橋を渡り右岸の河原にテントを張つた。少し高いたところにどゞや

らの大学山岳部と覺しき十名程のパーティがテントを張つて立ち寄つていた。

かくして入山才一冒は何事もなく平靜に過ぎて、やがて以後連日苦斗を繰返す羽目に陥入ろうとは神ならぬ身の知る由もなかつた。

（ダイム）甲府（五、〇）→芦安（五、四）

↓夜又神峰（九、三、一、一、三）

鮎差（二、三、一、一、〇）↓荒川小屋

（一、三〇）

廿二日(七月十六日) (曇)

朝たけが明るくなつて、いるのに気付いて慌てて寝ひ

起る。干物を焼いて朝飯に取り掛る頃、隣りの連中

は挨拶を交して吊橋を渡り吊足猿へと消えて行った。

六時半テントをたんてて出発する。しばらくは右岸の河原を行くがやがて行き詰る。シート等なりは丸木橋でも掛つているかどうか知れない。次は馬木して、とても渡渉どころではない。やがてなく右岸に高橋にて事にしたがひどく船を荷で上部三本碇(ひも)で寄りしな岩に足をとらぬ、ペリカン等、身体は立不に一歩み付けて乗せると落ちかかる、臂(ひじ)から抜けたサックほどのまゝ河原に素戔人だ。サックは腹を出して飯盒(はつぶれ)ラジエスは四枚、缶詰类は悉てサックなり甚ひ走してした。

此處を何とかへりて起すと再び右岸は行詰りとなる。渡渉可能と見て渡りに入る。膝より一寸上ぐらいう水位である。左岸に坐てしばらく行くとケムリ(カマツ)近くに坐て又右岸に移らねばならぬ。途中は狭はまり、流水は岩の間にで自由に泡立つてゐる。更に進んで流れごとにひびき、途中で足をとらぬ危く流さとく行なへ、無理無事で汗背(あせ)の方にうちり付く。



（この渡歩で時計は九時三十分を指して停まってしまひ以後四日間時計を一の山旅が続くなつた）

右岸に移るにケムリの滝下に出て又々渡歩せねばならなくな。その後二回程必死の渡歩が続くなつて後は渡歩を何と同避して右岸を行く。ところが当初ルートとして予定していた北沢の本谷に着いて見ると此久も渡歩が不可能なる事ばかり、そのまま本谷を行く事にする。しかし遂に渡歩地図は見当らず予定を変更し細沢を目指して翻越行を続ける。

広河原を過ぎ左手から小沢を一本入れたところで、沢は深、ブリヂエとなる。ここで左岸に移り右手のヤナギを捲いて三ツ滝を越え、左を小尾根を捲いてようやくの事で細沢の出合の滝上部へと延び着いた。細沢については全く未知数なりであろうが、そろそろ右岸の鞍に入り込む。殆んど人々入ったであろうが、そろそろ右岸の鞍に入り込む。殆んど人々入ったであろうが、そろそろ右岸の鞍に入り込む。殆んど人々入ったであろうが、そろそろ右岸の鞍に入り込む。

およそ三、四時間も登ったばかりか、水勢も次第におとうえて、やがて沢が二分十秒とてて水もなくなる。左手に入り最後の水槽で昼食をとり水筒に水を入れる。時折雲が切れて陽が射すと沢、様子が一變して気分まで明るくなるが、すぐがまたくる。

小鳥がさえり、高山植物が現われて来る。グラガラモトの沢筋を行く事一時何時より、ふいにス水が現れ出す。前方は白樺地帯となり沢はその林中に入り込んでいる。ここで右手の尾根に突上りでいるかしにルートを求める。こうがれのつゝには頭著な白い枯木が望みる。やすらぎ見えたこの登りが不安外長くて疲らせられる。ガレの上部に出て岩を登り、ハイマツを潛いでようやく車で尾根へと飛び出す。尾根筋は一帯

文三日（七月一七日）（雨、カラ星）

小雨けじり中をテントを疊んで出発する。ゲスが此

の谷間にまぶし込んで来て肌に冷。

滝の下前五十米程のところで左岸のがれに入る。およそ二百米も登つてから左手のヤナギに入つてトラバースする。

勿論踏跡などなし。全身ビッシンコクになき余からヤフ漕ぎ後舟み沢に底る。この辺から沢の勾配も急と云つて来る。或る時は水をかぶつて岩を攀じ、又或

る時はヤナギ漕ぎ湘行は続く。

およそ三、四時間も登つたばかりか、水勢も次第におとうえて、やがて沢が二分十秒とてて水もなくなる。左手に入り最後の水槽で昼食をとり水筒に水を入れる。時折雲が切れて陽が射すと沢、様子が一變して気分まで明るくなるが、すぐがまたくる。

小鳥がさえり、高山植物が現われて来る。グラガラモトの沢筋を行く事一時何時より、ふいにス水が現れ出す。前方は白樺地帯となり沢はその林中に入り込んでいる。ここで右手の尾根に突上りでいるかしにルートを求める。こうがれのつゝには頭著な白い枯木が望みる。やすらぎ見えたこの登りが不安外長くて疲らせられる。ガレの上部に出て岩を登り、ハイマツを潜いでようやく車で尾根へと飛び出す。尾根筋は一帯

ハイマツド寝泊め、山腹が余トレスは乃ううに、歩き出でて十步も行かぬうちにビツシリとした寝松の中に入り込んでしまひ再びその處へと戻り、中腹を辿る事にする。しかしそれが獸径でもあつたものか再び偃松の中へと入り込んで同じ必ずぐるくと回り始める。

「二れではいかん」と又尾根へと這へ戻り尾根筋をエッサ〜〜と潛ぐ事になる。やがて偃松の大木のとなり大今歩き良くなつて来る。そのうち寝松も次第に消えてがテ〜〜とした岩床に出る。

時々がスが切れて吊尾根や北岳谷を現出す。

高山植物も次第に数を増してなごやかなお花畠が展開する。

残雪が現われてようやく待望久し、銀丈の路へとおどり出る。此處でたゞちに南へと足を向ける。かすか立ち込めて全然見通しへ効かない。

間もなく向、岳に着く。久一振りに見る道標が霧ヶ谷中にボツンと立つてゐる。ケルンに導かれて三度下へと向へばあたりは薄暗くなりはじめ、自然歩かれ早くなれる。三峯を過ぎる頃にはいよいよ暮色も蒼然として足元で雷鳥が聲立て走り出す。

をとも走り林に下る。しかし遂に夜の帷はおりて、あたりは完全に闇の底にしむんでいた。

ランタンと点けて、左、尾根筋を羽色しようやく何とか場所を見付けてテントを張った。夕飯を食べてシラーフに長々と寝るだけ。

夜を過ぎて雨も停まつて薩摩が綺麗な空なくテントを巻いた。

才四日（七月十八日）（雨のち曇）

相安らず強風は西方からテントへと吹き付けて来る。水が得られぬ為、米はとがすに水筒の水で炊かねばならぬ。九時近く（推定）まつて所々中をテントを溢んで出来する。ガスの為視界は効かないが致る處にカルシグリードにて怪も悪くなる。

偃松地帯をすぎるとやがて怪の両側にはお花畠が展開する。間もなく熊の平に出て、テントで停滯している塙見かり木など。バーテイに合う。聞くところによれば此の先の森林地帯はひとく徑が悪くなるそうだ。

なるほど、いま足を踏み入れて見ると誠にひどいだ。登山者はヤブの中を勝手に歩いていると思われる。ヤブの中をしかも雨中だからたまらない。もうべくヤブを避ける林に歩き抜けろうちに遂には尾根と大井川の中間程のところを歩く林になつてしまつた。しかし相安ら下上部一帯はヤブが多いでそのまま中腹を歩き続ける。わがかを踏跡はあるが、隨所に糞を日裏するところを見る

ヒ獸径なのであう。屢々小沢やガレにぶつかって、その度に咎めしいやな處を登りぬけなければならない。

やがて大きなガレに行き当つて、こゝから尾根へと金牛つの安らぎして徑を辿つて下り始めるが、ふと見返ると時あたかもガスが切れ、右手に巖然と爐見の峯を覺えている。その時背後に物音を聞いて振り返るとカモシカが二頭、跳ぶように大井川の方へと走り去つた。再び取つて返し、倒木を越え、マチを今けてようやく今度こそ回還の道へ登り路へとび出した。既に雨も上つて西の空には青空が現われ、日は相當に傾いていた。

しばらく歩き良々徑が狭きお花畑が現われてやがて北荒川岳東面のガレに行き当る。あたりも急速に暮れ始めたので、徑より下と下方の草付きの傾斜地上テントを張つた。獸径の上にテントを張つたと見て夜に入つてガレに水を飲みに来る轟達にて下の開きでガリ／＼やられるのは少なからず驚かされた。

才五日（七月十九日）（雨うちくもり）

相も変わらず今朝も雨だ。
がれを登りつめると上部一帯は湿松となつて此處でス

雨具のまゝ、湿松を踏みぬけならない。尾根に出るとちゃんとした徑が現われるがガスの為視界は全く効かない。石子のケレからほ物すごい程風が吹き付けて来る。

尾根に出てから二時間も歩いただろか、ガスの中から人声が聞えて来た。十時 数人の登山者が屯する爐見岳山頂に着く。R大ワニケルカ連中から煙草をもら、羊羹を御馳走にする。

相變り下りガスの中を三、伏へて下り始める。所がうかつ年事に又々徑を回還しているのに気が付いたが「ま、よ気輕な一人旅」そのまゝぐん／＼と下つて沢に生る。地図で調べると三峯川の支流である。

車をも沢を下つて伐採所に出て徑を確ひめ、更に歩き良くなつた徑を下つて飯場の建つてゐる合流点に出る。こゝから林用軌道が敷かれているが今日はもう動いていない。此處から車をも三十分程川に沿つて下り營林署の宿舎に出て宿を覗く。夕飯を御馳走に余り久く振りに疊の上に大の字になつて寝転がる。夜に入つて締つく様な夕立がやつて来た。

才六日（七月二十日）（くもり時々晴）

九時半の定期軌道に便乗。時速十秒位の速度でタカタシ／＼と走ってくれる。山の分校に通

子供もあらへ、乗り込んで来る。軽道に沿つて流れ
る三肇川を次第に大きくな流れて變つて轟谷、中洲を
現われ、釣人の姿も見えて来る。

二時向余軽道にゆられて十二時終点杉島に着
く。茶屋で一杯の後こからは飯田線伊那市に
向うバスに乘次ぐ。

車窓から望むは南ア連山は相変わらずガスに包ま
れていたが、蒸れ林を暑さに、生掛ける時は涼し
かつた下界にも今や完全な夏が来ていることを知る
だつた。

へ後記へ

二の度の山行で私は今更ながら南アの重晶山とし
たスケルの偉大さに舌を巻いたものである。しかし
天候不順、これたとは言ふべき年苦手を繰返した
のも、研究、至駿、冷徹を判断等の不足、欠陥による
ものと深く自戒する次第である。

熊の平から北荒川岳の径は比較的新らしい為め、径が
無一ヶ所でござらず、多くの登山者が良く踏迷つてゐるよう
である。安木内書によれば熊の平→北荒川岳が僅かに
二時間半と立つてゐるので、悪い處を除く熊の平附近だけかも
知れないから尾根筋近くをうまく徑を拾つて歩くべきで
ある。北荒川岳附近では尾根をいく徑と山腹を捲
く徑の二つがあるが、山腹の徑は東面のかしこつかつて急
に消えどる。こゝはかしこを上につめて尾根帯を二、三十分程
走れば尾根筋に出るが、うつかりこうがれる横切つて延々
激時間の僅在薄ぎとやつた登山者もいるから注意する。こ
の尾根は塩見から逆に進つた方が迷ひも少なく得策だろう。

荒川はいくらか踏跡を判つきして来たとは言え、
禾谷一般的と云ふには程遠い。シースンオーフや
増水時福の流矢している時は特に困難であるから
充份検討してから入るべきである。しかし増水時どう
くとも荒川小屋からビカ沢に入らにせず、農鳥小屋又は

北岳小屋までは一日行程としては相当に強行ではなか
思ふ。小屋泊りでも天幕ぐらはべら本携行すべき
であろう。

岳劍山

筒井滿榮



る。一日一回、この夕立があるらしい。

室堂小屋に飛び込んだものゝ、今日の予定は、
一ヶ越なので再び下さ出す。五十分位、夕闇のお
とすれる少し前に一の越小屋に着き夜行の疲倦を
休めた。

才二日

一ヶ越—立山—別山—剣沢(泊)

八月八日—十一日

富山—千尋ヶ原—美女平

—追分—室堂——の越(泊)

前夜上野登二十一時十五分急行、北陸線に乗り翌朝
立山線、ケーブル、バスで十時頃標高一八五〇メートルと
言われる弥陀ヶ原高原に着いた。

小雨模様の中をのんびりと歩く。云々とした高原
チソカルマヤキスイの花が、私達を迎えてくれる。こ
れが北アツ一端とはとても思えない。時々工事の
ハサベの音が山の空氣をふるわす。

室堂に近づいた頃、可憐な夕立を見舞われ

朝、頼、かなわすしとくと降る雨の為、立山
三山(淨土山、雄山、別山)の一つ淨土山を登らず、す
ぐ小屋の前より立山の登りに向る。四十分程で頂上(一
三〇一〇メートル)に達する。上には神社があり大鼓(三内
出)と神主さんが大鼓をたたいてくれる。これは別山の
近くを走っても聞えるので、ホラ又三十円と言つて皆で
笑ってしまう。こゝからの眺めは素晴らしい、称だが、
カスの為がつかり。午後から時々青空が見え、美
い岩肌、そして雷鳥(シギ)や高山植物が恵み
ちを乗しませてくれる。

風が強くなつた。別山を越えて少し行くと乗越小
屋がある。そこからぐつと下ったところが剣沢小屋で
その周囲は美しいお花畠、雪渓が横たわり、クリセー
ドの練習をする人々が見える。

夕立の去った源次郎、ハツ峰の姿をみる。明日の期待に胸ふくよせて眼うつつく。

沖三日

剣沢小屋 — 剣岳 — 服剣 — 前剣
— 劍岳 — 剣沢 — 池平 (追)

素暗らし、お天気、朝六時出發。

霧がしたゝる徑をやがて雪深と頗り一服剣の發
りに至る。後立山の連峯が眺められる。少し行く

と前剣の急峻を登り、長次郎、平成谷の雪深
を眺めながら行く。登り降りのかづらさに、少し休む。

竿と称するところも

みうか比較的樂に
頂上に立った。三〇三

四時半目を覚す。昨夜、美いシルエットが
思はれ、外に出てスケッチをする。

七時小屋の人へ送られ出發。小窓、三、奥千
シネに雲が入り又流れ去る。仙人峠のあ庇烟
をすき、ぐんぐん下る。丁度目の前に白馬、唐
松、五竜、鹿島槍、すつと右に針の木と並んで
いる。阿曾原までおりると、トンネルを今保証せ

本の無料の軌道で一路槇平へ、そこからお犠
の寝草の林を車で黒部の溪流を顧に與ながら
宇奈月へと。温泉で汗を流し、黒部水底でのど
平へ向う。長、く、経

を西側通しに歩く。

大きなクレバス、角砂

砂の大きな洞りの林を雪渓に目を見張り、二
股も過ぎ雪渓の切れたところから最後の登り
が控えている。

登り切ったところに池があり、池の平でテントが
張られている。その上に小屋があり、小屋の周りの
夕やけ空に浮かぶ山影々美しいに、しばし中にに入るの
も忘れて見こめてしまった。

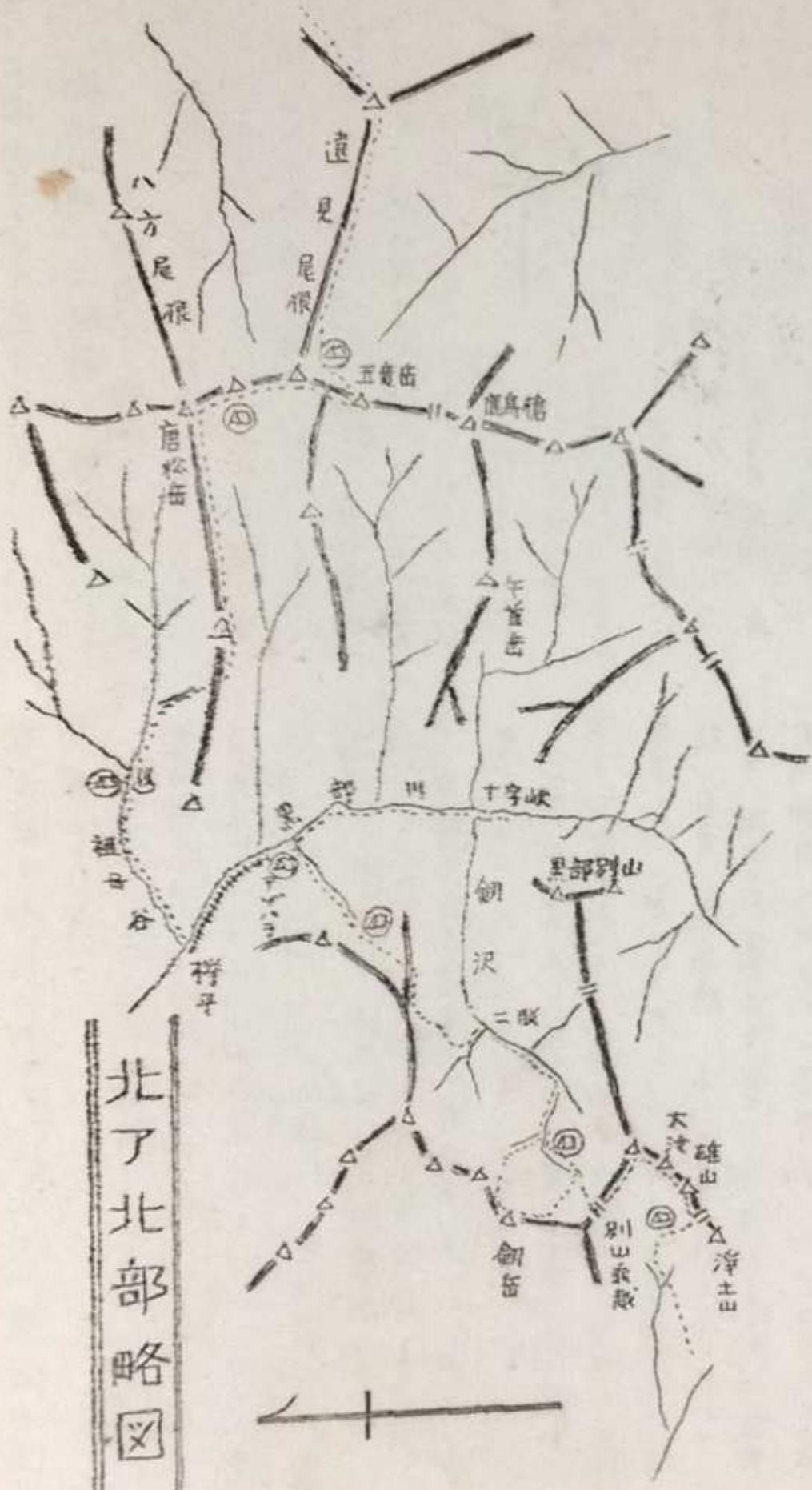
方四日 池平 — 仙人峠 — 阿曾原

— 宇奈月 — 黒部 — 上野

(終)

北ア 北部 縦走記

立山—剣岳—黒部—後立山



北了北部略圖

当初は立山から入って剣岳で岩場をやり、ハンデ谷から内藏
助平に出て黒部を上から下へと辿り、後立山に入つて針
木峠まで縱走しようと少々欲張つた計画であつたが、それく
裡々の事情で大分予定も変更されてしまつたが、それで
もその折々に小倉山のたゝずまいは、我々に忘れ得ぬ
ままぐる感興を与えてくれたのである。

一 山縣 昌彦

日時 八月二十一日（三十一日）

メンバー 山縣 昌彦、辻勝四郎

八月二十二日（晴） 富山からミクリゲ池へ

コースタイム 上野（九、一五）^{見付} 富山（七、〇〇）→十五分

美女平（九、〇四）→追分（一〇、〇〇）→天狗平（二、四五
一、一五）→地獄谷（一、四五）→ミクリゲ池（三、〇〇）

八月二十三日（曇りのち雨） 立山から剣沢へ

コースタイム ミクリゲ池（ハ、ニ）→一ノ越（九、〇一九、
三五）→雄山（一〇、一五一、〇三）→大津山（二、一〇、一一二、〇〇）
→明山（一、一五）→剣沢（二、三〇）

八月二十四日（晴） ハツ峰上半登攀

時間的余裕合からテンネ北面を変更ハツ峰に入る。

コースタイム 剣沢（七、四五）→長次郎出合（八、三五一、〇四）
→六峰（基部）（一〇、〇〇）→池谷乘越（十一三、一、一三、〇〇）
→剣岳（一二、〇一、一、三〇）→剣沢（二、一五）

八月二十五日（晴） 剑沢から仙人池へ

黒部川十字峠の先で橋がせきちでいるとの事でルートを
変更、左を仙人池は幕営禁止となつていて、

コースタイム 剑沢（九、〇〇）→真砂沢出合（二、一五一、〇〇）
→二段（二、三五一、〇、三〇）→池の平小屋（二、三〇）→
仙人池（三、〇〇一、三、一〇）→沢のほヒリサ幕営（三、四〇）

八月二十六日（晴） 黒部川

初めて雨が降らなく夜を過ごす。仙人谷の彼方に、
白馬の連峠が美しく輝いて出す。八時過ぎ出発。谷
そばの径を時々雪渓を渡り下り続ける。十時頃
阿曾原と仙人谷との今岐東に着く。仙人がんへの経
の傍に「工事中」ハサウ等の危険めしと書いた富山警
察署の立札が立っている。一まづ阿曾原小屋まで下
る。

小屋で間々と黒部下廊下はやはり十字峠の先一筋に
で枝道が切れているとの事。時間も早めで、十字架で

ミヤンガする予定を変更、荷物は此處に置いて往復する事にする。先程の今岐吳まで戻り、四十分位で仙人谷に着く。何しろ物凄い工事である。閉口する事は黒部に入るには此處の工事現場の中を或時は建築中の建物の中を、或る時は走り廻るトロッコの間を、或はス 飯場のせま、路地を抜け、更に上から

突然、カナヅチやツルハシが降つて来る建設中のトンネルを抜けねばならない事だ。こう間三十分钟左右が窄い黒部の悪場であろう。

久らくする釣橋で左岸へ渡り、やうと下廊下が始まる。黒部五郎、薬師に発した黒部川は悠久の昔から岩をえぐりえぐつて两岸に数百米の絶壁を持つ、渓谷となつて、なをかつ激流は白く岩を噬んで流れている。

詰に聞いた棧道も釣橋も、実は期待した程の事もなく（たまたま先頃登山者が一人墜落即死してゐる）少々飽きた頃、十字峠に着く。一名の如く左岸から剣沢、右岸からは檜小屋沢の水が落ち込み、一度十字になつてゐる。左岸を高く捲いて剣沢の大滻を写眞に收めようとしたが、どうも一枚が深くて諱めた。丁度君は十字峠より少し先迄行つて見たが余り變りはない」と戻つて来た。

一再に針金につかまつて寝る、仙人谷の悪場を通つて阿曾原へ帰る。

仙人谷上流（ヘニロ）→阿曾原小屋（一〇、一五）→十字峠（四五、五〇）→阿曾原（四〇）

八月二十七日（晴）

今日は中休みとも云うべき日で、のんびりである。九時五十分発の関西電力の軌道で樽平へ下る。この軌道は始から終りまで完全にトンネルの中を走つており、發着所（停留所とは言ひかねる）は山の中腹に穴をえぐつて、軌道のトンネルにぶつからせられた所である。

登山者は無蓋のトロッコに乗せられる。玩具のよくな機関車であるが、意外に速度を出して突走る。機関車のヘッドライトに照らされて、トンネルの上面のゴシエツした今にも落ちて来るような岩から雨の伞にしたゝり落ちる水が光る。その度に我々は首をすくめる。二十分ばかりでゐるが、地獄へ落ちていくような錯覚を感じさせる。

樽平の終点からトンネルの外へ出ると、むつとすると程外気が暑く感じられた。エレベーターは乗れないので歩いて急降すると、之も玩具の体自然と有蓋（從つて有料）の電車が停つてゐる。之が宇奈月までいく駅

近の終点 桧平駅である。駅の少し下の茶店に荷を
卸して奇勝とうたわれる猿飛まで見に行く。

こゝいらは宇奈月の方から来る遊山客が多く、アベツ
ノ連が汚い我々をじろじろと見る。何か奇勝だが分ら
ない猿飛（こゝいらの両岸が猿ばやついて猿が黒部川
とんで越えたとか云うらしい）にがっかりして再び茶店
へ戻り、釣橋で黒部川を右岸に渡り、祖母谷に沿って
登る。暑さにぼてる頃、祖母谷峠を越えて温泉に着
く。小屋の前の釣橋を渡り、右岸の河原の実に快
適なキャンプサイトに落ち着く。

早速裸になつて流れに飛び込む。山石間の砂地から温
かい湯が湧き出で正に露天風呂で快適そのものである。

夕方になつて流の下の温泉ではやはり冷たすぎるという
ので対岸の小屋の下にあろう、屋根の付いた浴槽に入り、
入りに行つたら一人三十円とられた。入りすぎてのぼせた
丁度（或は昨夜阿曾原で酔つ払つた人夫にまつた
アルコールを先程河原でまことに呑つたのが原因かも知
れぬ）は体を冷しに前の川に飛び込んだ途端に手足を
流してしま、川の底を探し回つてシャツの切れ片を代りに
拾つて束だ。（翌朝になつてそれがステテコの一部である
事が判明した）

再びテント地の河原に戻つて見つかりたのだが、ギザンフ地の少し下流には熱い湯が湧き出でている手坡
な場所があり、めざしく金を出して入りに行く事はない、
ことを附記しておこう。

阿曾原（丸五。）ましま桜平（一〇。一。）→ 桧平駅（一〇。二。）
↓ 猿飛往復 桧平（一三。〇。）→ 祖母谷温泉（一、三。〇。）

八月二十八日（晨後雨、風強し）

昨日の晴天に引き代え、朝パラカと雨があり雲が
低い。小屋の裏から南越え沃野に沿ひ暫らく急進続
く。二時間余でやっと飯鬼の田園に着く。

空は次第に暗く、身体はかなり消耗を感じる。飯
鬼谷を右に見、銅山跡に着く頃には本降りとなり、越
中側からの風も強く吹く。サックに着けたピッケルが木の枝
に引掛り歩きにくく、道を二人とも歎々と辿る。雨具を
つけたが全身濡れぬづか、視界は殆んど零。風の音だけが
聞こえすぎはじ。

唐松岳から生でいるらしい尾根を延々と右に捲いて
やつと唐松小屋に着いた時は二人共ラタカになつていた。

處でこの小屋には吾々の他にも白馬からやはり渓流
水すみとなつてやって来た数人の人が居たが、衣類を乾す
にましまずシリコーに壁の瓦を林を炭火があるだけ。
吾々は早々に小屋を引き上げ再び風雨の中を先程通

て未だ夜を少し度り、石垣を積んだうまい場所にてント五張つてもぐり込んだ。

ヒミコで大寝だつたのは、あれ後である。

夕食を済ませ着替ひをして、シユラーフにもぐり込んで一眼りした頃、丁君が異様な声を發して跳び起きた。シユラーフの中まで水が入つて未だといふ。そう言あれば、こちらも戻りあたりがおけいと懐中電灯を持ちて見ると、驚いた事にテントの足の方から枕元を通つて入口の外までカラードシーツの上をとうくと水が流れている。濡れていなければシユラーフの上側だけである。それからの大仕事は一筆書きに盡し難い。外は相変わらずの風雨で、テントはしつとりとし水流がぱり下つてゐる。寒気が激しい。テントの後ろ傾斜地から水流があるともにテントに注いでくるのを何とか流れを変え、隈でながらラジユースを燃し続け殆んど一枚き眼らずに叫してしまつた。

祖母谷温泉（七、三〇）→飯鬼の田舎（九、四五）
→唐松小屋（三、三〇）

八月二十九日（晴）

朝け方近く、キャンドルもなくなり、ラジウスも油が切れ（タンクはテントの外）待遠し、夜明けであつ

た。今日も又荒れたら、と不安な目で見上げる空はなかなか明るくなりなかつたが、やがて薄緋をはがすようにかへがれていくと真、青を空が現われ始めた。丁君は寂々と歯をがくく、わせながら外へ跳出して体操を始める。御夫体は濡れたシユラーフの上にヌアテコ姿で朝の一服りをする。

やがて被覆を越して待望の朝日がさつと昔日が不レニシ色のテントを照らす。細碧の空に唐松岳より劍立山、五竜山で輝き出す。

午前中は濡れた物一切を乾かすのに費やされ、その間に唐松岳頂上へ登つて三六〇度の展望を乗車しむ。何と言つても黒部川を隔てた劍岳の姿が立派である。東方には八方尾根が遙か下、四谷まで延びてゐるが、一望のものである。

午後やつと乾いた荷物を整理してのんびりと生發。途中白岳の前で信州側のゲスの中に自分の影がうつりその頬の向うに五彩の虹の輪がかかるプロッケン現象に始めて生蓮、歎嘆をうした。

昨夜の洪水のお蔭で、承から先の予定を変更、今日は五竜小屋の下東斜面お花畠の下にテントを張つてのんびりする。モンボウゲが満開である。

暮の雲海の美しさは筆舌に盡し難い。二人とも心肺無量、駆々と暮れゆく東の空に足入つてゐるうに星がまたゝ始めた。

唐松岳往復（登り一〇分、下り五分）唐松小屋（二、三。）→五竜お花畠下（二、三。）

八月三十日（晴）

黎所の美しさは又素喟らし。度深から二千米級の山が頭もさかせて、左方は妙高から戸隠、あと名も知らぬ峯々から奥秩父、八ヶ岳、富士山、南アルプスの山をめ、半天アルプスと號いて、いる。

今回、旅は五竜岳までと寝更へたのと、空身で五竜岳へ登る。かなりがらくして岩山である。こゝからの西望は唐松岳以上に素喟らし。

尾根はすぐ降りの鹿島槍の北峯、前山を経て針の木峠へと抜き、槍ヶ岳がみの特異を姿を見せてゐる。二人ともカメラのフィルムが足らなくなる始末。

鹿島槍から針の木峠までの予定コースを割愛する心残りはあつたが、この五竜での三六。度の展望は吾々の心を充分満足させるものであった。寝転ろがれば、黒い佐々に射程石の空に鷹が一羽、門を描いて鹿島槍の方へ飛んでいた。私にとっても幸福な一

時である。再びもと来た径を下り、遠見尾根を辿つて四時半程度までは、久一ガイドの下界、太糸南線の神城駅である。

オレンジ色のアルペン型テントの背負つて頬々と山から山へとさまよ、歩いて見たいといふ子供は、私の夢が実現された。この十日間の山旅、自今は幸福な男だとつくづく思ふ、眼鏡を下り落すと、ステテヨウ切れ片を腰にぶら下けた頬も、赤交十君に感謝しつゝ、墓塚と喧騒の渦巻く然し帰りざるを得ない、都合へと車中の人ととなつたのである。

マヤンフ地（七、〇。）→五竜岳（八、〇。着、八、〇。発）
マヤンフ地（九、三。着、一〇、一五発）→大達見（一一、三。着、一〇、五発）→神城駅（二、〇。）



マ

千ヶ沢の旧道出合でモヤンマ中、文さ
の欠亡に参った。我々に一フランを思ふ洋
べて喜びはしてくれたのは彼だつた。フランと言
うのは、うだ。その辺にやたらに生えているフ
ラキを手分けして採ること、これを皮もむかず
に味噌で味をつけ

ハクつくこと、なので

ある。この「フラン」は數
多の登山者の生理的

歴史を受け、見事
にすぐくと育ち

さしもうえな胃袋を
もつとしてその茎をア
ラツフしてもどうにも

余らず閉口していろ時
節目にかけ薬命に喰らついたのも彼だ。

同じ谷川岳で四時起床のあわただしくに飯と
味噌の飯盒を取り違え、肩の小屋であけてう

人ざりした事は数年前となる。

ヒツゴー次では、近リードーが下イル確保をまだし
ないうちに登りだし、リードーと一緒にあがりせるところ

か、本を落し始め、我で落ろかせた。武勇伝も
ある。たゞし近年とみに落ち付を増し、蓬峰
縦走ではリードーを仕かされ程成長したのであ
る。そして茂倉岳から左折し土樽駅が見え出し
た時、設まきの正しさに気がついて茂倉岳五角び
登るという快事をやらかして一層その名
を轟ろかせた。



象的であつた。

「のんびりと歩きて食ひ空氣を吸ひ込みば満足
だ。」とこの頃の彼は言う。

秋には紅葉の林の中へ一吹くらつている彼の姿
を発見するだろう。深く山を愛すこの男の姿を我
はいつまでも見守りたい。

溪 稜

オ5号



辻 蔵 書

山をそれ自身として、又その永遠なる美の故にこそ愛する人は、自分のいつにまでも若かさを山に捧げる事を決して杳まない。彼は何度でも山に座って行く、それは必ずや山が自分を失望させない事を知っているからである。山に對して最早自分の眠をあげるより他出来なくなつた時でさえ、なを彼は、自分の頼もしい力が衰ろえていないことに気がつくのだ。その力とは肉体的なものではなく、大自然の平和と静寂の中で長々間に蓄積された魂の力である。

—— Andre Roch ——

会務報告

待致一ふよう。

一、退会

龍ノ口茂生 病氣の爲、七月末日退会

服部公一郎 一身上ヲ郁合で退会

県体開催、埼玉縣々民体育大会山岳部門母
子十日五日、六日、九日、秋父西神山で行なわれ、我會
らはリーダ大武以下村田、育藤の三名が参加した。

顧向山縣氏レンジマー（国立公園指導員）に

昨今山の難難衆増に計處して日本山岳連盟にて
一計策として臨時レンジマー選出し、その任に当たせる
事となりたが、浦和市山岳連盟では山縣氏が直後として選
出された。をしこジヤーの資格は年令三十才以上人格
正直、山厂十年以上となつてゐる。

去る十月四日の山詫会に於いて縣体参加費用ケニア

を行ひ、山縣、荷井、島本、辻（眞）、吉田、菅野、田中、
辻（義）、松井、岩崎、星野、秋北、の諸君より一千百円を
得、千五百円を旅費として支出された。

新会員

吉野富子

浦和市元町一丁二四九

吉野さんは筒井女史と同級の方です。活躍を期

「訂正」

一、会報オミ号17夏の「こから川川に入る右の島
上」のうち三行目、バスの最終は新松田発八時四
十五分は十八時十五分と誤り。
一、会報オミ号19夏「25年度部長、田原幸紹は豈
田吉一の誤り。

後記

集

す去つてもう雪ヲ便々さ向くほどとなつて
一月いまして。

今夏は会員諸君諸様皆まく參
るかれた様です。大きな山行のヨリか
つたのも此の夏の特點と言えます。

しかし事一會の山行として見て時、何か疵一粒に欠けた
山行が多かつた様に思うのは一人遙歴言の吉田君だけで
はないであります。末年度はより意義のある意義ある泰山
を行なつていいもので。

今年も登山アームに災い申たるが、田の蓮瓣者多
数出ました。甲次などでも予想外な犠牲者が出来ました。
特に谷川岳の蓮瓣者が絶えないと言つては、二の山が
我會にとつても剛柔深いだけに考えさせられます。事谷
川岳に限らず、蓮瓣防止及びその救助等については、
浦和市岳連有たりが中心となつて、もつと積極的である。具體
的の方策を打出すべきではなしであります。その様な、
何等か計策も講じられていました。今年に、市岳連扣
置各田体の坪から一つの事故もなかつたという事は全く
の幸甚と言つ外はありません。

さて、会報發行が大変遅れて申訳けありません。
今号は夏場山行報告の特集として山行報告を中心には
繊集致しましたので少々変化には乞うかつた様です。
ス依頼した原稿の集りが悪く序説の記事が多めにも何か
物足らぬ感じです。全体の為、皆人手一つの会報として、
て、まとまつた者が記錄を残し、所見互通せる様に心掛けた、ものです。

毎度の事乍ら編集が更多く、筆耕がまたなくて読みづ
らに事と想りますが、不測の故よう一く御承取下さい。

上毎度の貴会の会報御送附厚く感謝致
します。今後ともよろしく御指導下さい。

各山岳会殿

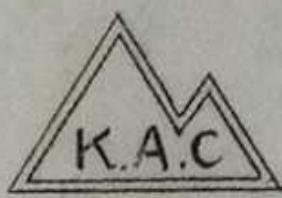
深根山岳会

深根
元五号

発行日 昭和三十二年十一月三十日

発行所

埼玉縣浦和市高砂町五の八九



渋稜山岳会

《埼玉県浦和市高砂町五ノ八九》